

2020年11月16日(月)

老球の細道575号

法事、法要に想う

会津バスケットボール協会 室井 富仁

ここ二週間間に叔母の葬式、母の命日、父の七回忌と法要、法事が連続した。特に叔母の葬式に際しては、幼少の頃に遊んでもらったり、本を読んでもらったりした母の妹がだんだん少なくなっていく現実に無常観を禁じ得なかった。親戚の葬式は、普段疎遠になっている親戚やいとこ達と久々に会え、悲しみに暮れる場でありながらも貴重な場である。

叔母の通夜、葬式は天台宗のお坊さんが務めたが、同じ日にそのお坊さんの母親の葬式も重なり、お経を読む声に自分自身の母親への気持ちも重なってか迫力があつた。

通夜の儀式が終了してお坊さんから法話があつた。「四恩(しおん)」という話であつた。四恩とは宗派によって色々な考えがあるようだが、天台宗では①父母の恩②衆生の恩(生きとし生ける全て)③国王の恩(私たちが安心して生きられる国を作る)④三宝の恩(仏、法、僧、尊き存在とその教え)を言う。

お坊さんが読むお経はトスティンの英語を理解するより難解であるが、法話はわかりやすく、ふだん何気なく過ごしている毎日を見直す絶好の話である。難解で理解できないお経を長い時間我慢して聞く後の法話はとても有意義な時間となった。

今回は同じ時期に母親を亡くしたお坊さんが、「四恩」の中で特に父母の恩についての話を涙を浮かべて話してくれた。自分一人の力で生きているわけではない。親がいて、そしてその親がいて何代にもわたる人間関係によって今私たちはここに存在し、生きている。そしてまた、今現在も色々な人たちに支えられながら生きていられる。そのことをもう一度肝に銘じ、毎日感謝して生き、限られた時間を大切にすることを説いてくれた。

法話を聞いていて思いついたことがあつた。受けた恩には感謝であるが、「他人に対して恩きせがましくしない」ということである。よく教師やコーチの間の会話に「俺が教えた」「俺が面倒をみてやった」「俺が世話をしたのに挨拶にこない」などと恩着せがましく話す人がいるが、聞いていて非常に聞きづらい。私もどこかで無意識に使うこともなきにしもあらず。いつも自戒の念を忘れてはいけない。

恩は受けるものが感じることであり、与えるものが意識してはいけない。どこかの神社の境内で石に刻まれた言葉を見つけたことがあつた。「憎しみは水に流せ、恩は石にも刻め」。私は「与えた恩は忘れてしまえ 受けた恩は棺桶に入るまで脳みそに刻め」。

父の七回忌の法事に孫たちも全員出席させた。お坊さんがお経を読んでいる時に孫達がうるさくなったので外に連れ出そうとしたら、お坊さんが「うるさくてもそこにいさせなさい」と言ってくれた。集中してお経を読んでいるから気にならないという。孫たちにも亡くなった曾爺ちゃんの供養をさせなさいということであつた。家に帰って来て、孫達はお坊さんのお経を読む姿を真似して私たち大人を笑わせてくれた。しっかり見ていたのである。

改めて人生は「生死事大、光陰惜しむ可し、無常迅速、時人を待たず」である。